

矢的 竜

Kazumasa: The Last Sacrifice
Yamato Ryu

光秀の
影武者



史の秀
影武者

矢的 竜

Kazumasa: The Last Sacrifice
Yamato Ryu

矢的竜（やまとりゅう）

1948年、京都府生まれ。滋賀大学経済学部卒。『女
花火師伝』で歴史群像大賞優秀賞、『花火』で中・近
世文学大賞優秀賞、『舞い上がる島』で歴史浪漫大賞
特別賞、『不切方形一枚折り』で九州さが大衆文学
賞佳作を受賞。著書に『折り紙大名』『大江戸 女
花火師伝』、『あっぱれ町奉行 江戸を駆ける』があ
る。これまでになかった独自の視点で歴史の有り得
べき一面を描いて注目される歴史・時代小説作家。

みつひで かげ むしや
光秀の影武者

平成26年12月20日 初版第1刷発行

著者——^{やまとりゅう}矢的竜

発行者——竹内和芳

発行所——^{しょうでんしゃ}祥伝社

〒101-8701 東京都千代田区神田神保町3-3

電話 03-3265-2081(販売) 03-3265-2080(編集)
03-3265-3622(業務)

印刷——堀内印刷

製本——ナショナル製本

Printed in Japan © 2014 Ryu Yamato

ISBN978-4-396-63454-4 C0093

祥伝社のホームページ・<http://www.shodensha.co.jp/>

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。ま
た、代行業者など購入者以外の第三者による電子データ化及び電子
書籍化は、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。
造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品
がありましたら、「業務部」あてにお送り下さい。送料小社負担に
てお取り替えいたします。ただし、古書店で購入されたものについ
てはお取り替え出来ません。

目次

序章 姉川の戦いあねがわ

第一章 出奔しゅつぽん

第二章 決断

第三章 本能寺ほんのうじ

第四章 安土城あづちじょう

第五章 天王山てんのうざん

第六章 光秀の首みつひで

終章 復活

5

19

99

140

158

200

236

253

光秀の影武者

カバー写真

image depot pro / E+ / Getty Images

装幀 川上成夫 + 林每里花

目次

序章 姉川の戦いあねがわ

第一章 出奔しゅつぽん

第二章 決断

第三章 本能寺ほんのうじ

第四章 安土城あづちじょう

第五章 天王山てんのうざん

第六章 光秀の首みつひで

終章 復活

5

19

99

140

158

200

236

253



序章

姉川あねがわの戦い

一

四つの大きな尾根から成る小谷山おだにやまは遠目にはなだらかに見えるが、いざ登るとなると大きな岩や急な傾斜に阻まれ、決して容易ではない。

四尾根の中でも南北に延びる二つを利用して、小谷城の城郭群は構成されていた。方々の樹木を切り払って、本丸、中丸、京極丸、山王丸さんおうのうなどの館や砦とりで、防護柵ごさくが幾重にも張り巡らされている。

その最も低所に位置する出丸でまるに、大柄で筋肉質の初老の男が立っていた。生え際にやや白い物が見られるが、眉は黒々と太く、鼻の下から顎にかけては黒髭くろひげで覆われている。

元龜元年（一五七〇）六月二十一日の夕刻である。

眼下には、皿を伏せたような虎御前山とらごぜんやまがあった。

初老の男——浅井家あさいの重臣で支城の佐和山城さわやまを預かる磯野員昌いそのかずまさは、林立する大旗の上部に染め抜かれた永樂通寶えいらくつうほうの文様を読み取り呟いた。

「信長直々のお出ましか」

物見の報告によれば、虎御前山に本陣を敷いた敵は織田家だけで二万。そのうえ、三河から徳川家康が五千の軍勢を引き連れて加勢に駆けつけている途中であるという。

迎え撃つ浅井方の兵力は八千に過ぎない。員昌は臍を嚙んだ。

浅井の八千に、越前の朝倉義景の援軍二万を加えれば互角以上に戦える。それが当初の目論見だった。

ところが、朝倉からの援軍は一万しか来ないことになった。そのうえ、率いる総大将も朝倉景鏡から、格下の朝倉景健に変更された。これでは敵と味方双方に与える影響が格段に落ちることは否めない。

朝倉方には振り回されてばかりだ。

員昌は、頬から顎を埋め尽くした自慢の髭を撫でているしかなかった。

（わからぬ。なにゆえ信長は、これほどまでに朝倉の性格を見抜いた策を打ち出せるのか……）

大永三年（一五二三）に浅井氏が独立して以来、北隣の越前朝倉家とは五十年近く同盟関係を保ってきた。

その朝倉家が、信長との決戦を前にして、援軍を一万しか寄越さないという。浅井家も朝倉家も、信長の掌の上で踊らされているようにしか思えなかった。

織田信長と浅井長政とは、義兄弟の関係にあった。六年前に長政は信長の妹・市を嫁に迎えて

いるからである。この政略結婚により、湖北の浅井領に東の間の平穩が訪れた。

信長は湖南の六角氏の併合に乗り出し、本陣を佐和山城に置いた。だが城主の磯野員昌の献策や加担の申し入れに一顧も与えず、徹頭徹尾無視した。

昨年しゅうねんの十二月、信長が朝倉義景に上洛を命じたことから、浅井家は織田と朝倉の狭間で苦勞する日々を迎えることになる。年が明け、春が来ても、朝倉は上洛に応じなかったのである。業を煮やした信長は、三月下旬にも再び要請を行なった。

浅井久政は、懇意にしている義景の老臣から二度にわたって相談の書状を受け取り、対応に苦慮していた。そこで員昌は、足利義昭の將軍就任祝いという形で義景に入洛させてはどうかと献策した。

久政は快く筆を執り、朝倉に勧告状を認めた。

それでも朝倉は応じなかった。四月の初頭、義景は信長に対する無言の返答として、敦賀の金ヶ崎城、天筒山城の改修強化に取り掛かってみせたのである。

激怒した信長は、三万の兵を率いて朝倉討滅に向かった。その途上、浅井家には「加勢せよ」との高圧的な書状を送りつけてきただけだった。

四月二十日、やむなく長政は兵を率いて海津までは駒を進めたが、そこに留まった。織田方の度重なる進軍要請にも応ぜず、信長の自重を待っていた。

ところが長政の意向を無視して、信長は若狭から敦賀へと侵入。金ヶ崎城、天筒山城を陥落させた。朝倉方は越前に退却を始め、それを織田勢が追う。朝倉は滅ぼされる形となったのである。

る。

ここに至って、長政は信長を討つことを決断し、海津を發ち、西近江路を北上した。

背後に浅井という新たな敵を抱えた織田方は、一転して袋の鼠となった。信長は軍勢を置き去りにしたまま陣を離れ、朽木元綱の領地を横断して京へと逃げ帰った。

すんでのところで信長を取り逃がした長政は地団駄を踏んで悔しがったが、員昌は即刻、京に向かつて進撃するよう献策した。危機を脱したとはいえ、織田勢は根なし草に等しい。兵糧や弾薬を補充し、負傷兵の穴を埋めるには、一旦本拠の岐阜に戻らなければならぬ。それを待ち受け、あるいは追い撃つ我が方が絶対には有利と、員昌は考えたのだった。

しかし誤算は続く。草津か日野で決戦を挑もうという浅井の策に、二万の軍勢を率いる朝倉景鏡は同意せず、近江・美濃の国境での会戦に固執したのだ。朝倉には、端から信長と対決する気などなかったのである。

五月二十一日、信長は無事、岐阜に立ち戻った。

それでも員昌は、朝倉の援軍二万を越前に帰すことだけは避けたいと考えていた。必ずや侵攻してくるであろう信長を迎え撃つには、そのまま援軍を近江に滞陣させておくより手がなかったからだ。

朝倉の足輕や雑兵たちは、根が百姓である。稲が成長する初夏、兵たちは一日も早い帰郷を望んでいた。そこへ折悪しく、浅井長政を六月中に滅ぼしてみせると豪語する信長の挑発的な言動が伝わってきた。この攻勢予告を聞いた景鏡は、すかさず宣言した。

「信長の魂胆こんたんは読めておる。口先だけでわれらを近江に釘づけにし、疲弊ひへいさせようというのじや。信長の軍勢は、このひと月半ほどの間に、朽木の山中を命からがら逃げ帰り、休む暇なく鈴鹿越えの難所に挑んだ。もはや這う這うの体で、疲労困憊ひろうこんぱいは疑いなし。そういう軍勢が、すぐさま大戦に臨めるはずはない。我ら朝倉はいったん越前に引き上げるぞ」

親の監視から抜け出す口実をやっと見つけた子どものように、景鏡はそそくさと逃げ帰っていった。

まさに信長の思う壺だった。織田の軍勢は、朝倉のように百姓を駆り集めただけのものではない、戦うことだけが本職の集団だったのである。朝倉二万の軍勢が去ったわずか四日後、信長の大軍は予告通りに岐阜を発ち、その日のうちに近江に入った。そして今日、六月二十一日には、もう員昌の眼の前の虎御前山に本陣を敷いている……。

員昌の眼が、敵陣の動きに反応して険けわしくなった。

すっかり暮れなずんだ闇の中で、松明たいまつの明かりが慌あわただしく揺れ動いている。しばらくすると灯火の列は次々と虎御前山を離れ、南の方角に移動しているのが認められた。その先には浅井の支城・横山城よこやまがある。

虎御前山に本陣を敷いて城下を焼き払い、野外決戦に引きずり込もうと挑発を続けていた信長が、矛先ほしきを横山城に転じようとしている。だが浅井側は一万の援軍が到着するまで、静観するほか手がない。八千の軍勢で二万の敵勢に挑むことは、自滅以外の何物でもないからだ。

（信長の裏には、朝倉の事情に通じている者がおるに違いない。やつやつの補佐役はいったい誰なのじゃ）

これまで員昌は、足利義昭あしかがよしかきが信長の「影の参謀」だと考えていた。

義昭には、信長という後ろ楯うしろだてを得る直前まで、一乗谷いちじやうだにの朝倉館で過ごしていた過去がある。義景の優柔不断さを知り尽くしていてもおかしくはないだろう。

だが、いくら信長でも、將軍に祭り上げた男を戦場にまで連れ回すのは無理があった。義昭は義昭で、京で將軍の權威をひけらかすのに夢中だという。だとすると、いったい誰が信長の知恵袋しほたかづいになっているのだろうか。

宿老の柴田勝家しばたかついえも、越前えちぜんの情勢に無頓着むとんちゃくではいられない立場である。いまでも眼下の虎御前山に陣を連ねている身ゆえ、臨機応変な献策は可能だろう。

（しかし、柴田勝家にしては出来過ぎじゃ）

員昌の見立てる勝家は「猪武者いのしむしや」の範囲を出ていない。勝家の頭脳程度なら恐れることはなかった。

（頭が回るということでは、猿と呼ばれている男かもしれぬ）

猿というのは綽名あだなで、木下藤吉郎秀吉きのしたとうきちろうひでよしという立派な名を有しているが、氏素性うじすじやうも怪しい成り上がり者と伝わっている。そのような男に名家の実態が見抜けるとは考えづらい。

員昌は信長の本陣を見据えた。

（いずれわかる）

ともかく目先の敵に対処しなければならない。虎御前山に揺らめく無数の灯火を注視しながら、員昌は今後の作戦に思いを巡らせ始めていた。

二

虎御前山の織田信長本陣から見る小谷山は、まるで牙を剥いた野獣のような、不気味な威圧感を放っていた。矢弾を吐き出す狭間が無数の点となつてこちらを睨んでいる。林立する三つ盛亀甲紋の幟や旗印は、風が吹くたび、まるで勝ち誇つたように音を立てて一斉に翻る。しかし、その威圧感をものともしない男がいた。

信長は、居並ぶ重臣からやや離れた位置に単座するその男、明智光秀に鋭い視線を向けた。

「そちの申したとおりであつた。いまごろ長政は義景の消極的な対応に落胆し、茹蛸の如き形相で齒噛みしておることじやろう。うつつふふふ」

その甲高い声を、重臣たちは押し黙って聞いている。

「だが、少々やり過ぎたのう。これでやつらが小谷城に閉じ籠もつてしまえば、今までの苦勞が水の泡じゃ」

城下を焼いたり、わざわざ敵の真ん前に陣を敷いて挑発したりした策が無駄になる——信長は、言外にそう決めつけていた。その意を汲み取つた光秀は平伏すると、はっきりした声で言い切った。

「杞憂にございます」

「されば、敵方は野戦を挑んでまいると申すのだな。光秀」

光秀にとって、この仕事は重要な意味を持っていた。結果次第で、信長の家臣に登用されるか否かが決まるのだ。横に居並ぶ重臣たちも、登用の際は一足飛びに重臣の列に加わる男と警戒して、光秀の次なる言葉を待ち構えている。

「間違ひなく城外に打って出てまいりまする」

光秀は上体をやや起こすと、平然と答えを返した。信長はさらなる問いを重ねる。

「浅井勢の強さは天下一じやと思うが、その中でも先鋒を任される男、そちは誰じやとみておるか」

光秀は、それまでより強い語調で断言した。

「磯野員昌しかおりませぬ」

信長の切れ長の眼が一層薄くなった。その眼には、はっきりと憎悪が宿っていた。

「うむ。やはり、あの男か。わしの目指す天下布武はのう、その磯野ごとき武勇自慢の男を排除することよ。明日はいよいよ、そやつと浅井家を叩き潰せるということじやな」

光秀は口を噤んだ。

「どうした？ 光秀」

光秀は、先を続けてよいものか逡巡した。信長は適材適所を使い分ける男であり、出過ぎた真似を嫌悪する点では常人の域を脱していたからだ。

光秀は、いまだ信長の家臣ではない。少し前まで越前朝倉家に寄寓きぐうしていた。

そもそも光秀と義景の縁もそう深くはない。諸国を流浪ろうろうしていた光秀の博識ひやくしに惹かれて臣下に置いたものの、名門に胡坐あぐらをかく義景は、他国の流れ者を重用するつもりなどなかったのである。

しかも朝倉の本拠の一乗谷には先客が居座っていた。足利幕府第十二代將軍だった義晴の子で、還俗げんぶくしたばかりの義昭である。一年ほど前から滞在し、上洛の支援を要求し続ける賓客ひんきやくに手を焼いていた義景は、義昭を岐阜の信長の元へ厄介やくかい払いすることを思い立った。その従者として指名を受けたのが光秀だったのである。

信長は義景と違って、出自しゆつじより能力を買う男だった。一目で光秀の聡明そうめいさを見抜くと、朝倉家の内情に精通する「案内人」として帯同することを即決したのだった。

畏れながら——と光秀は切り出した。

「戦いくさのことゆえ、そこまではわかりかねます。されど、敵方の狙いは、われらを小谷城に張りつかせておくこと。それゆえ、浅井は一気呵成いっきかせいに攻め寄せてきても、すぐに退くものと思われま

す。その撤退をいかに食い止め、殲滅せんめつするか。その力量が問われましょう」

光秀の頭上に、信長の満足そうな笑い声が落ちてきた。

「うつつふ。敵はそういう動きに出るか。されば確かに、そちの責任ではない。そちに求めたのは朝倉義景の頭脳の仕組みに限ってのことであり、浅井退治までは含めておらなかったからう」